

船橋市海老川における灯ろう流しイベントの計画

千葉工業大学 学生員 ○樋口 涼子
 千葉工業大学 松本 剛
 千葉工業大学 正会員 篠田 裕

1. はじめに

20 世紀後半からの急激な都市への人口集中，市街地の拡大は，都市環境を大きく変えた．河川に目を向けてみると，生活雑排水の増加に伴う河川水質の悪化，洪水など，様々な影響が現れた．また，市街地などを流れる都市河川は，汚濁もひどく，地域住民の問題意識も低かった．

人々の河川への興味や問題意識は変わりつつあるが，さらに，地域コミュニティの場であり，憩いの場である河川を大切に，意識することが必要と考える．そこで，都市域における河川を対象として河川の現況を把握し，地域市民に親しまれるような環境作りを考え，都市河川の活用法の企画・立案を行なうことを考えた．

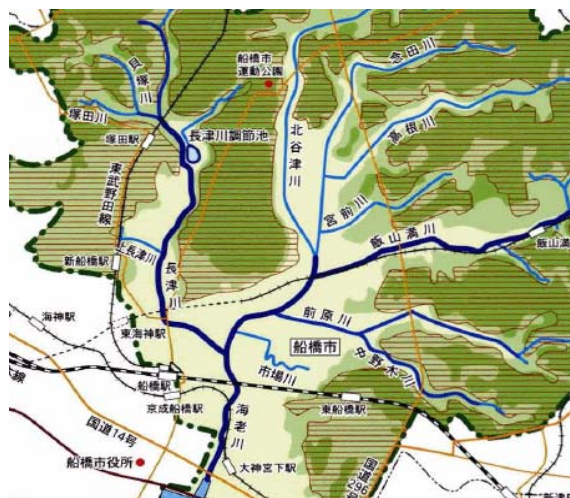
2. 研究目的

本研究は，実例として，近年急激に都市化が進行した千葉県船橋市を貫流する二級河川の海老川を対象河川とする．この都市河川が身近な存在になり，海老川を見直すきっかけが必要である．そこで，住民が河川に集まる機会がもてる地域住民参加型，河川や川面の魅力に気付くことのできる行事として，“灯ろう流し”を企画・提案する．

3. 対象河川

河川名：海老川（えびがわ）

調査地：千葉県船橋市夏見 5 丁目付近



図－1 海老川流域概略図

海老川は，東京湾に流れ込み，淡水と海水が混じりあった塩分の少ない汽水域である．海水面が潮の干満によって変動するために，満潮時には海水は河口をさかのぼり，干潮時には淡水がより下流まで流れ込んでいる．

この流域には船橋市と鎌ヶ谷市を含み，建設省の水循環再生構想の対象流域の 1 つである．流域面積は約 27 km²であり，海老川本川および前原川など 7 本の支川が流れている．近年生活排水等は，少しずつ改善されてきてはいるが，依然として流入しており，環境に影響を与えている．一方で，春には，河川の遊歩道には多くの桜が咲き，例年桜祭りが開かれている．

表－1 海老川の概要

項 目		諸 元	
流域面積		26.52 km ²	
幹線流路延長		8.00 km	
支 川	支川名	流域面積	河川延長
	北谷津川	3.91 km ²	4.00 km
	念田川	1.80 km ²	3.00 km
	高根川	1.71 km ²	2.80 km
	宮前川	0.84 km ²	1.50 km
	飯山満川	5.12 km ²	4.50 km
	前原川	3.25 km ²	2.34 km
	長津川	5.88 km ²	2.99 km
	海老川下流	4.01 km ²	2.67 km

4. 灯ろう流し

灯ろう流しは，お盆の行事，送り火の一種である．死者の魂を吊って，現世から再びあの世へ送り出すために，灯ろうやお盆の供え物を海や川に流す日本の行事である．灯ろう流しのメリットとしては，地域住民が自由に参加できる行事であることから，地区の住民が川面の魅力に気づくきっかけとなり，人々の意識を河川に向けることができることと考える．

5. 真間川灯ろう流し

当研究室は，千葉縣市川市で行われている“真間川水系境川灯ろう流し”に，毎年参加している．この真間川の例が参考となるので，以下に要点を記す．

キーワード：灯ろう流し，親水河川，都市河川，海老川，水辺のイベント

連絡先：〒275-8588 千葉県習志野市津田沼 2-17-1 千葉工業大学 工学部 建築都市環境学科 TEL：047-478-0446

E-mail: shinoda@ce.it-chiba.ac.jp

・真間川について

真間川は、千葉県西部で江戸川から分かれ、東京湾に注ぐ河川である。そのため、真間川は海老川と同様、潮の干満で水量が増減し、流れの方向も変化する感潮河川である。

・灯ろう流しの目的と歴史

真間川で灯ろう流しを始めた目的は、桜の名所として市民に親しまれていた兩岸の桜が、頻発する洪水対策の一環として、河川幅拡幅のため切られることが決まりかけたときに、ふるさとの川との心の繋がりを残し、また、多くの市民の川に対する意識を向上させることを期待するものであった。

昭和 57 年に始まり、昭和 60 年、61 年は工事により中止になったが、今年で 21 回目を迎えた。

・実行組織

“真間川さくらの会”を中心とした、NPO、ボランティア団体、地元町会が実行委員会を組織し、その運営に当たっている。

・開催場所の選定

開催当初は、かなり長い流下区間で行っていたが、改修工事以降は、新たに作られた親水テラスまでの上流区間としている。

・灯ろう流しのコスト

灯ろう流しの開催資金は、大半が自治体による会費（3 団体参加）、後援（5 団体参加）で賄われている。また、実行委員会が自ら灯ろうの販売を行い、その売上も資金の一部としている。一方、支出については、灯ろう流しに参加・協力して頂いた方々への接待費や、謝礼費、運営行程にかかる準備費、材料費、整備費および設備費などがある。

・使用器材

放送設備、テント、オイルフェンス、照明設備、発電機、ボート 2 隻 など

6. 海老川灯ろう流しの計画

6.1 開催場所の選定

開催場所の選定を行う際、以下の項目・条件を満たす場所とする。

（選定項目）

1. 灯ろうが直線的に流れる、流れが安定している場所
2. 観客が放流状況を目視しやすく、身近に感じられる場所
3. 河川周辺が広く、スペースを確保しやすい場所
4. 公衆トイレが近い場所
5. 事故防止として、道路（車道）に直接面していない場所

以上の条件をもとに、実際に現地視察を行い、開催場所として、海老川ジョギングロード（鷹匠橋～さくら橋）を選定した。



図－2 鷹匠橋付近（開催候補地）

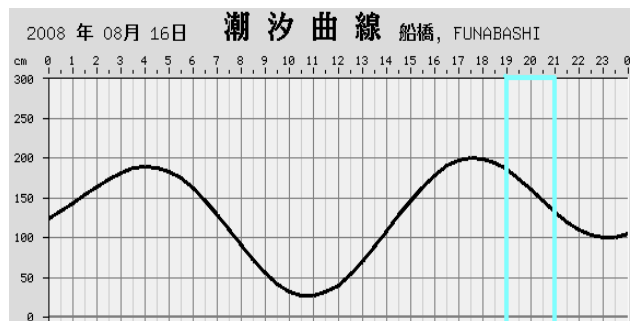
6.2 開催日時の選定

開催時期については、幅広い年齢層の参加と集客をめざし、夏休みの時期とする。お盆の帰省時を避け、お盆後とする。

日時については、集客が見込める週末とし、雨天順延を考慮すると、土曜日に行うことが望ましいと考えられる。また、海老川は感潮河川なので、お盆前後の引潮となる日を予測し、灯ろう流しを行う。灯ろうの放流を行う場合、大潮の時刻に放流することが望ましいが、日没時刻と、21 時までに行事の終了を勘案して、開催時刻を 19 時～20 時と設定する。

6.3 具体例

以上の条件から、平成 20 年夏の開催日を想定すると、以下のようになる。



図－3 潮汐曲線（2008 年 8 月 16 日）

（国土交通省：潮汐リアルタイム情報より）

開催日：平成 20 年 8 月 16 日（土）

雨天順延 8 月 17 日（日）

7. 終わりに

本報では、都市河川の一例として、千葉工業大学近傍の河川である海老川での“灯ろう流しイベント”の計画を行った。海老川で灯ろう流しを行なうには、運営資金の調達、設備が準備できれば可能であると云える。しかし、最も重要なことは、ボランティアを中心とした各種団体や地域住民の協力なくしては、なし得ないものであるということである。

さらに、河川使用に当っては関係機関の許可が必要となるが、安全対策の確立、放流後の灯ろうの回収等、クリアすべき課題は多い。